
ウルトラマンゼロ外伝 ~ブルーファイトウォーズ~
フルフル

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンゼロ外伝

～ブルーファイトウォーズ～

【Nコード】

N1061Z

【作者名】

フルフル

【あらすじ】

宇宙を飛行中のゼロは消えかけのウルトラサインを見つけた。

「地球を守護した赤き戦士」

「私の次元は赤き戦士は至れない」

「蒼き身体を持つ戦士よ」

「助けて欲しい」

意味深な内容のウルトラサインを見つけたゼロは蒼き戦士を探す旅を始める。

そして蒼き戦士の秘密が明らかとなる。

「プロローグ」(前書き)

よろしくお願いします。

「プロローグ」

「プロローグ」

そこは広大な宇宙空間。

果てのない宇宙には果てのない悪意を持つものが多々居た。そしてなぜか狙われるのは「地球」という惑星ばかり。

悪意を持つ侵略者から度々地球を守り抜いた戦士がいた。

その戦士の名は「ウルトラマン」と呼ばれた。

紅き体に銀のラインを秘めた屈強な戦士だ。

自らが傷つき、苦痛に倒れても守り抜いてきた地球。

その地球は今平穏を保っている。

そう今回悪意あるものに狙われたのは珍しく地球ではない。

惑星らきすた。

別名・幸運の星である。

~~~~~

「そろそろ戻るか・・・」

宇宙をパトロールしていたウルトラセブン。

の息子のウルトラマンゼロはパトロールを終え、母星に帰還しようとしていた。

「ん・・・何だあれは？」

ゼロは帰る途中に宇宙空間で点滅する光を見つけた。

「これは・・・緊急用ウルトラサイン!？」

そう、ゼロが発見したのはウルトラマン専用メモ「ウルトラサイン」だ。

「消えかけてるな」

そのウルトラサインは光を失いつつあった。

かろうじて読めるが消える寸前だった。

ゼロは急いでその内容を確認した。

「地球を守護した赤き戦士たちよ」

「我の次元は赤き戦士は至れない」

「蒼き身体を持つ戦士よ」

「助けて欲しい」

ウルトラサインの内容はそんなものだった。

「どういうことだ・・・・・・?」

その内容をゼロは掴めずにいた。

「とりあえず青いウルトラマンを集めろってことか・・・」

把握はしていないが勘で行動するのがゼロだ。

「俺は・・・赤とか混じってるけどいいのか？」

「お前は大丈夫だ」

どこからか不思議な声が聴こえてきた。

「誰だ！？」

ゼロは周りを確認し、警戒態勢をとった。

「案ずるな、我はそのサインをだした者だ」

「蒼き戦士の基準は我が決めている、お前は大丈夫だ」

「蒼き戦士をとりあえず連れてきて欲しい、ダメな奴はここで弾く」

少し勝手な言い分だった。

「お前は誰だ？」

ゼロは声の主が誰か確認した。

「我はらきすた星という星の王だ」

「なぜ蒼き戦士だけなんだ？紅い奴じゃダメなのか？」

「今日の運勢で赤は縁起が悪い」

「帰るぞ」

「冗談だ、侵略者がプロテクトを張っていて紅き戦士は侵入不可なのだ」

ゼロは首を振りながら言った

「なるほどな・・・いつまでに集めればいいんだ？」

「今から480時間で我の星は滅びる」

「だからせめて360時間以内に蒼き戦士を集めて来て欲しい」

「大体分かった、じゃあできるだけ集めてくる」

「ありがとう蒼き戦士よ」

そこで声は途切れ、聞こえなくなった。

「あおいウルトラマンか・・・コスモスくらいしか知らねえな」

「オヤジに聞いてみるか」

ゼロの言うオヤジとはウルトラセブンのことだ。

ウルトラセブンは紅き戦士。

ゼロと呼ばれることはないだろう。



「やっぱ一度戻るか・・・」

ゼロはM78星雲・ウルトラマンの故郷に戻った。

これが蒼き戦士たちの闘いブルーファイトの始まりだった。

## 「プロローグ」(後書き)

少し適当ですが楽しんでいただけたら。

## ステージ1 「蒼き戦士達の搜索」(前書き)

連載2回目です。

適当感がありますが頑張りますのでお願いします。

## ステージ1 「蒼き戦士達の搜索」

謎の声に助けを毀れたゼロは現在、M78星雲にいた。

青いウルトラマンを探すためにベテラン戦士である自分の父「ウルトラセブン」に情報を貰うためだ。

「青いウルトラマンか・・・コスモス・・・あとダイナも青くなれたな・・・」

ゼロはセブンの下に向かいつつ、自分が知っている青いウルトラマンを思い出していた。

ゼロの話す「コスモス」・「ダイナ」も地球を守った戦士の一人だ。

コスモスのボディカラーは青ベースに銀のライン。

ダイナは基本タイプである「フラッシュタイプ」ならば銀・赤の戦士で青い戦士ではないが。

タイプチェンジをすることで青・銀の青き戦士「ミラクルタイプ」になることができる。

「ダイナはOKなのか・・・？まあ連れていけば分かるか・・・」

そんなことを考えつつ、ゼロは宇宙警備隊本部についていた。

「お、ゼロじゃないか！」

ゼロは後ろから聞こえた声に、振り向いた。

「おお、エース……さん？」

ゼロに声をかけたのは「ウルトラマンエース」

セブンと同期の英雄であり、現役の勇者だ。

「さん付はよせ、お前は既に立派なウルトラ兄弟だ」

そう、ゼロはウルトラマンベリアルを倒した功績を認められ、ウルトラ兄弟の仲間入りを果たしていた。

「ああ、分かった。それはそうとオヤジがどこにいるか知らないか？」

「セブンか？ 確か今さっき部下を連れてパトロールに出ていったな……」

セブンは今でも現役の戦士。

パトロールもしっかりこなしている。

「ええ？ マジか……じゃあアンタに聞きたいんだけど」

「何だ？」

「体の青いウルトラマンを出来るだけ集めたいんだ、居所を知らないか？」

「少しなら分かるが・・・一体どうしてだ？」

ゼロは自分が蒼き戦士を探す理由と経緯をエースに話した。

「なるほどな・・・そういう訳か・・・」

「ああ、だから出来るだけ多い人数集めたいんだ」

「気持ちはわかるが、多忙な戦士も、行方不明の戦士もいる。思うようにはいかないかもしれん」

「行方不明？」

「ああ、任務に行ったきり帰ってこない戦士の事だ」

「ソイツの名前はなんて言うんだ？」

ゼロはなぜかその「行方不明の戦士」に興味をもった。

「その戦士の名前は、ウルトラマンアグル、ガイアと共に戦った青き戦士だ」

ウルトラマンアグル。

地球の海のエネルギーを司る、蒼き戦士の一人だ。

根源的破滅招来体「ゾク」とのガイアと協力した最後の戦いの後、姿を消している。

事実、ティガ・ダイナ・ガイアが別世界に招かれたときも姿を現す

ことは無かった。

「アグルか・・・なんか強そうだな！」

「ああ、元々は人間と敵対するウルトラマンだったが、ある怪獣の死を切欠にガイアと共闘するようになったそうだ」

アグルは人間を嫌っていた。

地球を汚すのは人間だと、違う意味で地球を守ろうとしていた。

だが、ガイアとの会話・決闘、そしてある怪獣の死を堺に人間を守る戦士になった。

「ガイアと知り合いなら、ガイアに聞けば分かるんじゃないのか？」

「ガイアも死力を尽くして探したが見つからなかったそうだ」

アグルは消息不明の戦士。

警備隊では「消えた蒼き水流」と呼ぶ者もいるほどの伝説になりつつある戦士でもある。

「そうか・・・・・・じゃあまずはソイツで決まりだな」

「聞いてなかったのか？ガイアが探しても見つからなかったんだぞ」

「でも、キングじいさんなら何か知ってるかもしれない」

ゼロの言うキングじいさんとは「ウルトラマンキング」のことだ。

M78星雲最強にして最大の権力を持つ永遠の英雄だ。

自ら戦闘に加わることは殆どないが、若き才能を見る目は人一倍だ。

かくゆう、ゼロもキングに鍛えられた戦士の一人なのだ。

「キングに聞く気か？」

「ちよつと無理があるか・・・」

キングはちよつとやそつとではひと目に出ることはない。

いつも誰も知らないどこかにいることが多い。

「なら、宇宙管理局に行つてこい」

「何でだ？」

「そこにアグルが残したウルトラサインのコピーがある」

「マジか！」

「ああ、誰も意味が理解出来なかったがそこに記録がある」

「ああ、じゃあ行つてみるわ」

「あと一人心当たりの戦士はいるが、呼んでおくか？」

「ああ、頼む」



ゼロは本部から徒歩4分のほぼ隣りにある宇宙管理局に向かった。

「なんだ・・・これ？」

ウルトラサインの内容はこうだった。

「時間がない」

「ボガアルが目覚める」

「時間がない」

「命に代えても、ツルギの鎧を」

「マジで意味わかんねえな・・・」

ゼロは1mmも意味を理解できず、困り果てた。

「ぼがあるってなんだよ・・・ん・・・ボガアル・・・」

ゼロは前にセブンに無理やり読まされた「恐るべき怪獣ファイル」を思い出した。

バードン・ゼットン・イフ・ゾク・バルタン星人……

星の数ほどいる怪獣の中でもさらに危険な怪獣を収めたファイルだ。

ゼロは当時そんなものに興味はなかったが、しぶしぶ読んだのだ。

Aランク怪獣・Bランク怪獣などと分けてあり、さらに上のSランク怪獣の欄。

「ボガール」

あらゆる惑星を食い散らかす、悪魔のような怪獣の総称。

派生系の怪獣にボガール・モンス等もいるが、まとめてボガールと呼ばれている。

事実、ウルトラマンヒカリの故郷・惑星アーヴはボガールによって滅ぼされた。

数は少ないものの、寿命が長く危険怪獣でもトップクラスの怪獣だ。

「このボガールってのは……もしかしてボガールのことか？」

「だとしたら……ツルギの鎧ってのはヒカリのアレか……」

ウルトラマンヒカリは故郷をボガールに食われた後。

復讐に燃える復讐鬼と化した。

その際に身に付けていた鎧が「アーヴギア」

それを身に付けたヒカリは「ハンターナイト・ツルギ」と呼ばれていた。

「アーヴギアにボガール・・・おだやかな話じゃねえな」

ボガールはメビウスとヒカリの共闘によりやっと消滅した凶悪怪獣。

たとえゼロでも苦戦は免れないだろう。

「こりゃ、俺一人じゃ危なそうだな・・・アイツら呼んでみるか・・・」

「あ、もしもし・・・オレだよ、オレ・・・いや詐欺じゃなくて・・・」

「グレン？悪いけどすぐ来てくんねえか？・・・ああじゃあミラーとジャンボも」

「じゃあよろしく」

ゼロは本部の無線を勝手に使い誰かに連絡を取った。

「まあ4人そろえば勝てない奴はいないな・・・」

果たしてゼロは誰に連絡をとったのか・・・

## ステージ1 「蒼き戦士達の搜索」(後書き)

はい。

青いウルトラマンを題材にしたこの小説。

なんとかやっていけそうです。

うる覚えの名前なので怪獣の名前とか間違っかもしれません。

そこは是非レビューいただければ。

続きまーす。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1061z/>

---

ウルトラマンゼロ外伝                      ~ ブルーファイトウォーズ ~

2011年12月5日19時02分発行